すばらしく晴れた秋日のことである。

灘井基一はひさしぶりの完全な暇を得たため、都内に出かけることにした。昨晩に翌日の天気を調べたときには出かけることになるのを予感していた。予定していたわけではないが、突発的過ぎる外出というわけでもない。

この人物は、自然をこよなく好いている。自転車で百キロ走ることも、徒歩で山道を独り延々と進むことも、まったく厭わないのは自然を想っているためだった。自然とは、緑だけではなく蒼穹やすべての雲や虫などを指した。彼は、その生涯で何度か自然を想う理由について思考したことがあったが、自宅で家族に見守られながら逝くまでにはっきりとした理由を得られなかった。

基一は始発のつぎの次の電車に乗った。始発の電車では、車窓の外にきれいな日の出を見るには早すぎるからだ。基一の乗る電車は海辺を長く走る。水平線の先からゆっくりと顔を出す日の出と、その逆の日の入りが気に入ったのもあって、基一は都心から離れた場所に引っ越していた。基一は、どの時期はどの電車に乗ればきれいな日の入りと日の出が見られるかをルーズリーフ一枚にまとめ、玄関に掲示している。

朝早い電車と言えどもやはり基一以外にも乗客はいる。基一は配慮を忘れずに写真を撮った。やがて太陽が完全に昇り切ると、基一は読書を始めた。とある作家の短編集である。作家は有名ではなかったが、基一は好きだった。十ある短編の内、五つまで読んだところで本を閉じた。キリがよかったのと、行きは五つまでと決めていたのと、老夫婦が乗車してきたからだった。

どうぞ、と言うと、老夫婦はふたりで「ありがとう」と言ってから顔を合わせ、旦那さんが奥さんに促した。元気そうなのは奥さんだった。旦那さんは片方の足を悪そうにしていた。旦那さんは何をがまんしているふうでもなかった。奥さんは「もう！」と控えめな声で言い、旦那さんを無理矢理に座らせた。優しい顔の旦那さんは申しわけなさそうに奥さんに「わるいね」と言うと、強かそうな奥さんは優しいかおで「いいのよ」と言った。

基一はそんなやりとりを見てからその車両から降り、他の車両に移ろうとした。が、他の車両もいっぱいだった。基一はホームのベンチに座って次の電車を待った。が、次もそのつぎもいっぱいだった。そうではない電車が基一の前に現れたのは十五分後のことだった。それ自体はべつに良かったのだが、その間に短編を二つ読み進めてしまった事だけが悔やまれた。

「もう一冊、持って来るべきだったな」

つぶやきながら立ち上がった。ふと空を見た。ホーム上の屋根に遮られていない、ちょうど電車の上あたりを見た。雲ひとつない鮮やかな青色で塗りつぶされていた。

基一は表情を変えなかった。つまりは穏やかな表情のままでいた。

基一は青い空を見るだけで充実させることができた。

× × ×

かつて籍を置いていた大学は下高井戸にあった。
そして住んでいたアパートは善福寺川を越えた先にあった。
基一は四年の間に首都に済み続けることはできないと理解した。それは金銭的な理由というより、自身の性格や趣味嗜好や考え方への理解からくる悟りだった。
しかし、喧騒やアングラな街は好きだった。
最初の目的地は上野だったが日暮里で降りた。基一は歩くことが好きだった。とくに、日暮里から上野間。他には新宿から浜松町間。など。
上野には寄り道をしながらむかった。到着する頃にはその両手に紙袋が持たれていた。
八時過ぎ頃という朝と呼べる時間帯にもかかわらず、上野にはそれなりに人がいた。決して混雑というわけでは無いが、早朝にしてはすこし多いくらいにはいた。
基一は噴水のある広場に向かった。ベンチは未だ選び放題の状態にあった。基一は迷わなかった。基一には『いつものベンチ』があった。朝はあたたかく、昼はすずしく、夕方はやや肌寒くなる位置にあるベンチだった。基一はそのベンチの存在を誰にも明かしたことがなく、また知っている存在は猫以外に覚えがなかった。
やはり誰も座っていないベンチにどっかりと腰を落ち着かせ、しばらく陽の光のあたたかさを肴に澄み渡る秋空を楽しんだ。やがて人が多くなってくるとイヤホンを着け、音楽を楽しんだ。音楽の趣味は様々で多岐に渡り、なんでも聞いた。今日はラップの気分だった。音楽に飽きてくると、本を開いた。惜しみながらゆっくりと読んだが、昼を待たずに読み終えてしまった。
ラップからクラシックに変えてから、つぶやく。
「どうするか……」
基一の中にあるのは二択だった。
ひとつは、ベンチを離れて神保町まで食べ歩き、古本を買って、穏やかなうちに帰る。
もうひとつは、ベンチで昼食を摂り、そのままのんびりと昼寝をかまし、夕方に目を覚ましたら飲食店をハシゴし、翌朝の始発で帰る。
どちらも同じくらい魅力的で、即決し得なかった。基一は悩んだ。
流れていく人々の姿を見ながら、悩んだ。地面を見ながら悩んでいると、カラフルな靴が視界に入ってきた。入ってきたまま十秒ほどが経過し、基一は顔を上げた。
ブロンドで長髪の、顔つきは明らかに異国人の女性だった。口をぱくぱくと動かして何か言っているようだったが、視覚情報に脳内を埋め尽くされた基一はイヤホンを外すのを忘れた。
女性がむっとして耳を示すようなジェスチャーをして、やっと気付いた。
「なんでしょう?」
「ベンチ、私も座りたいのでずれてもらってもいいですか?」

流暢な日本語だった。純日本人の発音だった。
「ああ、すみません」
「いいえ、ありがとう」
女性はそう言って座ると、茶色の紙袋からハンバーガーを取り出し、がぶりと豪快に食らった。チェーン店ではありえない大きさとおいしさの肉を頬張っておきながら、その顔はなぜか不満げだった。基一は自分の昼食としてハンバーガーを購入した店のハンバーガーを食らう美人を横目に、彼もまた茶色の紙袋からハンバーガーを取り出した。
女性も横目に見ていた。
「あっ、限定の」
包みを見た瞬間、女性は思わず言っていた。スルーしてもよかったが、基一は流暢に異国語を話すブロンドヘアの美人に少なからず興味があった。
「おいしいですよね、この店のハンバーガー」
基一は落ち着いた様子のまま、朗らかに返した。
「……それ、限定三食のですよね」
「そうですね」
女性は何も言わなかった。ただ基一の手に持たれたハンバーガーをじっと見た。おもちゃを見る子どものような、鮮魚を見る猫のような、そんな目だった。
ははん、と基一は悟った。
「ひと口、食べます？」
「できれば、半分」
「ええ?!」
なんて強欲な女だ。
「……ダメですか」
「うーん……」
基一を見る目は無理を承知で向けられていた。だからこそ基一は考えた。相手が流暢に異国語を話すブロンドヘアの美人でも、ふつうであればそこに余地など有るはずもなかった。無理を言っていることを理解しておきながら言わずにはいられなかったその背景への興味などが余地を生んだ。
「……僕、人と話すの好きなんですよ」
「……私もです」
互いに、だろうな、と思った。
「それで、今日ひさしぶりに都内に来てて、このあと神保町に行って古本を買うか、夕方までここで時間潰して夜は浜松町辺りでワイン飲もうか悩んでいるんです」
「……はあ」

女性は話の先が見通せなかったが、次の言葉でつまり何を言いたいのか理解した。
「夕方……十六時まで時間潰すために本持って来たんですけど読み終えてしまっているんです」
「……あ、飲みに付き合えってことですか？」
「惜しい。夕方まで話相手になってくれるのであれば、交換してあげますよ。半分と言わずに」
「ぜんぶ？！　いいんですか！？」
「いいですよ。ハイ、どうぞ」
女性は手に持つハンバーガーを基一に渡し、差し出されたハンバーガーをおそるおそるというふうに受け取る。そして、宝箱を開けるように包みを解いた。姿を現したハンバーガーはたしかに一日限定三つまでにするに適当な姿をしていた。冷めてもなお匂いは芳醇で豪快で、肉は輝いて見えた。女性の目は食い終わるまでそれに釘付けになった。
おいしく食べる女性を見て、基一は満足そうに息を吐いた。

「ありがとうございました！　おいしかったです！」
田中葵はしあわせな顔でそういった。名乗ったのはその後だった。
「私、田中葵って言います。この恩は忘れません」
「ははっ、夕方まで忘れなければいいですよ」
今時聞いたことのない、日本昔話のような言い回しに基一は思わず笑った。
葵は気にせずに訊ねた。
「おにいさんのお名前は、なんていうんですか？」
「灘井基一です」
「ナダイキイチ……漢字ではどう書くんです？」
「さんずいにむずかしいで灘。井戸の井。キは基本の基。一はそのまま数字の一。です」
空に書きながら説明した。
「昭和のひとみたい」
歯に衣着せぬ言い様に基一は頬をゆるめた。
「たしかに今時のじゃないですね。葵さんの名前はいつでも通用しそうだし、かっこいい」
「でしょう、気に入ってるんです」
ややためて、じゃあ、と前置きし、
「葵さん、ってお呼びしても？」
基一は異性の目を見つめて訊いた。異性に慣れている人間の目だった。
「え、はやくないですか？　いいですけど」
葵は見つめ返した。彼女もまた異性に慣れていた。
短い会話とやり取りで、互いに互いの人慣れ具合を理解した。
会話はどんどんと転がり、

「私、今日がひさしぶりの休みなんです」
「そうなんですか、いつぶりの？」
「たぶん二週間ぶりの」
「なかなかの働きっぷりですね。そんな働いてると嫌になりません？」
「や、楽しいから嫌ってことはないんです」
「いいなあ」
「いいし、ろくに寝てないってことはないのでいいんですけど、今朝起きて空見たらなんだか妙に青空がうれしかったんですよ。こんないい歳して」
「いい歳って、僕とあまり変わらないじゃないですか？」
「え、いくつです？」
「いくつに見えます？」
「その質問が男性の口から出るの初めて聞きました。二十七」
「明後日で二十七です」
「え、うそ。先月末で二十七です。私」
「はは、ほぼほぼ同い歳でしたね」
「びっくり」
「僕も、」
「え？」
「僕も良い天気の日には嬉しく思いますよ。だから今日ここにいるわけですし」
「なにかイベントでもあるんですか？」
「いえいえ、……僕も久しぶりの休日のせっかくの好天を無駄にしたくなかったんです」
「き…基一さんも忙しくしてるんですか？」
「時期によりますけど、先週くらいまではだいぶ忙しなかったですね」
「嫌になりません？」
「……葵さんと同じですよ。たぶん」
「奇遇ですね」
「本当ですね」
「「……」」
「ハンバーガー、いつ買ったんですか？」
「誰にも言わないでくれるなら」
「聞いても誰にも言わないですよ。私、口が固いで有名なんです」
「嘘っぽ」
「幼馴染が小学生の頃好きだった男子の名前、いまだにだれにも言ってませんよ」
「ははは、おもしろ」

「それはよかった。それで、どうです？　信用に足ります？」
「……知り合いなので、開店前にもらいました」
「へえ、お知り合いでしたか」
「ちょっと無理言ったので少し怒られましたけどね」
「……基一さんは飲食系で働いてるんですか？」
「いや、ちがいますね」
「じゃあなに経由の知り合いなんですか？」
「学生の頃、結構な頻度で通ってたんです。週に三回とか四回とかそういう頻度で」
「ほぼ毎日じゃないですか。よく太りませんでしたね」
「いや、太りましたよ。写真あります」
「え、見たい」
「ほら、これ」
「え、なんというか、丸々とした子豚って感じですね」
「全然オブラートじゃない」
「あははっ、だってそうですし」
「そうだけど」
「学生の頃がそうだったっていうことは、ダイエットしたんですね」
「そうですね、そのおかげでナイスボディをつくり上げられました」
「ここで脱いじゃだめですよ」
「脱がないですよっ、そのくらいの社会常識はちゃんとあります」
「いいツッコミ」
「ほら、これが直近のやつ。ちょっと映り悪いですけど」
「えー、どれどれ――っ……」
「どうです？」
「すごい。どれだけ費やしたんです？」
「……えっ？」
「時間とか精神力とか、そういうの」
「……ど、どうだろう」
「だって普通に働きながら鍛えてるんですよね、毎日かどうかはわからないけど、こんな身体がつくれるくらいに鍛えて、食事も考えて、自制して、心に鞭打って……」
「すごい褒めてくれますね」
「ほめるというか、感心って言うほうが近いです。だって、丸々とした身体から、今はこんなすっきりして均整がとれたムキムキの身体に……」
「そう言ってもらえるのは嬉しいですね、恥ずかしいですけど」

「これこそ嫌になりませんか？」
「筋トレも好きです」
「筋力トレーニングだけならそうかもしれないですけど、仕事で忙しくてトレーニングもままならない週だって時にはあるでしょう？」
「ありますけど、そういう時こそ自分を律するいい機会って思ってます」
「うわ、ストイックだ」
「……葵さんは勉強とか頑張った方じゃないんですか？」
「…まあそうですね、人並みより多少は」
「勉強だって同じような側面があるじゃないですか」
「それはたしかにそうですけど、今は勉強も読書もしてないからなぁ……」
「僕なんか学生の頃はほとんど最低限くらいしか勉強してなかったですよ。毎日が部活漬け」
「何部だったんですか？」
「大学生の頃はバイトと趣味漬けでした」
「えっと、じゃあ高校生の頃」
「ラグビー部でした」
「あー……なんか、ぽいですね」
「それ、よく言われるんですけど、どういうところがぽいです？」
「えー？ うーん、考え方とか……ちがうな……うーん、なんとなく」
「なんとなくですか」
「なんとなく、です」
「……葵さんの部活は？」
「中学は卓球。高校は美術部兼読書サークル。大学は無所属。っていう流れです」
「一貫性がないですね。なんか理由が？」
「卓球部は友だちにお願いされて、美術部は興味があって……というふうですね」
「……言いたくないんでしょうけど、読書サークルは？」
「……好きな人がいたので」
「あまずっぱい」
「すごいすきだったんですよッ！」
「うお」
「かっこよくてやさしかったんですよー……」
「ははっ、……引きずってるんですか？」
「いやッ、それは無いですけど」
「でも、今でもよく覚えてるんですね」

「そうです。たぶん忘れられません」
「あははははっ、いいですね、そういう想い出」
「……基一さんはないんですか？　そういう想い出」
「僕は部活漬けでそんな暇なかったからなあ」
「それは高校生の頃の話でしょう？」
「うっ」
「大学生になってからはどうなんですか。あるでしょ。ゼッタイ」
「そんな、忘れられないようなものはないですよ。ふつうですよ。フツウ」
「ダウト」
「本当ですって」
「ええ～？　……本当のほんとうに？」
「ほんとうですよ」
「ふぅ～ん……」
「で、どういう恋をしたんですか？」
「……転校生に一目惚れして」
「おお」
「たくさん話しかけて」
「おお」
「本が好きだって言うからそのための同好会を一緒につくって」
「おおっ！」
「えっと、反応がいちいちうるさいですよ」
「すんません。……黙って聞くので続きをどうか聞かせ下さい」
「……祭りも行って、文化祭も回って、土日も一緒に出かけたりして……」
「……して？」
「したのに、想いを伝える前に引っ越されたんです」
「えっ」
「何も言われなかったんです。本当に急に、どこかに行っちゃいました」
「家は？」
「アパートはきれいさっぱり引き払われてました」
「……それは忘れられないですね」
「いやもう本当に。……あーあ、早く言っておくべきだったなー」
「僕も……」
「え、何か聞かせてくれるんですか？」
「なんか、傷を開いてしまったようで申し訳ないので」

「そんなことないですけど、なんかあるなら聞きたいな」
「甘酸っぱくはないですよ？」
「なんでもどうぞ」
「付き合ってた彼女に家族諸共夜逃げされました」
「……うわ～、ヘビーだ……」
「税金の支払書とかあったんでなんとなく前兆はあったんですけどね、僕の場合」
「理由は支払いに耐えかねてってことですか？」
「そうですけど、主には借金の、……でした」
「ワーオ」
「しかも闇金の」
「Wow」
「僕のところにまで来てなかなか大変でしたよ」
「たどって、ですか」
「そうですね」
「今はもう大丈夫なんですか？」
「いわゆるケリがついたみたいです」
「……それって――」
「たぶん想像の通りです」
「「……」」
「……私のと比較にならないじゃないですか」
「いやまあ、僕ももうほとんど消化しているのでいいんです。オエっ」
「いやもう絶対うそじゃん」
「いやいやいや、もうだいぶ治ってますよ」
「えぇー、いまおえってなってたのにですか？」
「東京にまた来れてるだけでだいぶ進歩ですよ」
「……大変でしたね」
「それがあって今の生活があるので、差し引きゼロより少しプラスくらいです」
「強かだ」
「そうですね」
「今は、どこに住んでるんですか？」
「田舎の方ですね」
「ここから一時間圏内くらいの？」
「そのくらいの」
「へーえ、仕事、何してるんですか？」

約束の時間まであっという間に過ぎていった。その頃にはもう友人になっていた。
約束の時間になっていることに先に気付いたのは基一で、そのことをとてもとても残念そうに言ったのは葵だった。
「あ、もう十六時だ……」
「え。ああ、もうこんな時間」
白々しさが少しも隠せていない一言だった。
「私、用事があってここに来ているわけじゃないんです」
白々しさをすぐさま見透かしたうえでの一言だった。
「ワインですけど、いいですか？」
基一の質問もまた、見透かされていることを理解したうえにあるものだった。
「お酒の話はしてませんでしたね。私、ワインが一番好きなんです」
「それはよかった」
ふたりは笑顔を突き合わせた。
そして翌朝までにふたりはたくさん話し、たくさん笑い、たくさん飲み、何事もなく別れた。
いつかの約束はしなかった。連絡先も交換しなかった。どちらかが言い出せばそうなったのだろうが、しないほうがおもしろい、と互いに思ってしまった。
しかし、またいつか会うような確信が互いにあった。

× × ×

余談。
田中葵はその後結婚した男性に、男性が自然を想う明確な理由を与えられなかったことを深く残念に思い、死ぬまでその思いに囚われ続けた。最期に彼女が思ったのは、充実した生への執着ではなく、やっと謝れる、ということだった。
果たして彼女は幸せだったのだろうか。